

## 半井桃水作品研究：初期新聞小説を中心に

金, 裕美

<https://hdl.handle.net/2324/4784379>

---

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

氏名	金 裕美				
論文名	半井桃水作品研究—初期新聞小説を中心に—				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松本	常彦
	副査	九州大学	教授	秋吉	収
	副査	九州大学	教授	波瀲	剛
	副査	九州大学	講師	松枝	佳奈
	副査	九州大学	准教授	小野	容照

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、明治期から大正期にかけて新聞小説作家として活動した半井桃水（1860—1926）の初期新聞小説を検討し考察する。ここで初期新聞小説というのは、大阪の朝日新聞社が東京に進出し『東京朝日新聞』を発行し始めた明治二十年前半に、それまで同社の朝鮮通信員であった桃水が、帰京後に同紙に連載した小説を指す。本論文の目的は、その検討と分析を通じ、新聞小説作家としての桃水の作家像を描き出すことにある。

全体の構成は、序章、七章の本論、終章から成る。

序章では、半井桃水に関する基礎的な資料と先行研究の紹介と課題および本論文の目的を提示する。従来の桃水の評価は、樋口一葉研究の一環として位置づけられがちで、作品が言及される場合も朝鮮文学との関係に偏りがちである。桃水研究の課題は、桃水の本領である新聞小説作家としての活動と新聞小説の具体的検討にある。序章では、樋口一葉日記などを傍証に、桃水自身にも新聞小説作家としての自己認識があり、「新聞の小説」についての桃水の問題意識を抽出した上で、本論文の目的が、桃水の初期新聞小説の具体的検討と新聞小説家としての作家像の描出にあることが示される。また、第一章以下の各章の概要が示されている。

第一章は、本論全体の背景となる伝記事項を整理紹介した上で、朝日新聞社の通信員として朝鮮に滞在していた桃水が、『東京朝日新聞』の新聞小説家になった経緯と背景を検討する。経緯については、朝日新聞社や同社に入る以前の小新聞時代の人間関係が大きく働いており、その背景については、大阪から東京に進出した朝日新聞社の動向や状況が関わっていることを指摘する。

第二章は、『東京朝日新聞』に最初に連載した小説「啞聾子」の構成と内容を検討する。構成上の特色として、伝統的な文芸の延長にあり、従来の新聞小説の読者にも好まれた講談形式の仇討物という小説の意匠について指摘し、内容上の特色としては、当時の新聞紙条例などの時事的問題が桃水の得意な「婉曲の筆」によって表現されていることを指摘している。さらに、こうした構成上また内容上の特色が、第一章で提示された「新聞の小説」という桃水自身の課題とも呼応していることを確認している。

第三章は、幕末を舞台にした第一部と明治中期を舞台にした第二部から成る「くされ縁」を検討し、この二部構成が『東京朝日新聞』一周年の期日と関係していること、さらに、第一部と第二部の関係が、江戸と文明開化の明治という対照性の導入と関係することを指摘する。その上で、本作も十六夜清心など伝統文芸の趣向に開化風俗などの時事性を盛り込む点で、第二章での指摘と同じように、桃水が「新聞の小説」を意識した創作をしていると指摘する。

第四章は、「海王丸」作中で最も重要な話題は船舶の沈没事故にあるとし、作中の記述と明治期の海難事故報道とを対比検討する。具体的には、同作の背景に 1886 年のノルマントン号遭難事件を想定する視点から、作中の保険や海難救護などの記述や場面を読解する。さらに本作が伝統文芸に多い仇討物の意匠を借りる一方、海難事故に関係する同時代言説の撰取という時事的課題を表現していることを指摘し、第二章や第三章での指摘と同じように、そうした作品の性格には「新聞の小説」という課題に応じる桃水の姿勢があると考察している。

第五章は、舞台も登場人物もすべて西洋に取材している連載小説「夢」を検討する。作品の内容からは直接導かれないものの、同作執筆の背景に桃水の入院闘病体験があることを桃水自身の発言などを引きつつ確認する。その上で、作品内容の分析として作中に多い二項対立的な関係に注目し、とりわけポーランドとロシアという二項対立の関係は、作品連載時のロシアと東アジアをめぐる国際情勢とも関係する寓意性があるという視点から作品を読解している。

第六章は、桃水の代表作で先行研究でも朝鮮文学との関係から注目されてきた「胡砂吹く風」について、作中にも言及がある『朝鮮紀聞』や『鶏林医事』の受容の様相を具体的に検討する。桃水は、『鶏林医事』の編者で釜山勤務経験がある小池正直と桃水との接点の可能性などを指摘しつつ、典拠と作中の記述との対比検討から作意の分析が行われている。

第七章は、「胡砂吹く風」の人物設定や登場人物の言動を同時代読者の視点から分析する。具体的には、主人公（林正元）の名前の背景として倭館周辺での出産事件や当時の国際結婚をめぐる問題があること、あるいは、作中人物の言動に桃水が釜山滞在時に記事化した事件の投影があることなどを指摘している。それらの検討から、物語として読みやすい作品前半と事件が輻輳して物語としては必ずしも円滑な展開となっていない作品後半という構成上の性格が派生したと指摘する。

終章は、各章の要点を整理し、全体としての結論を述べている。具体的には、明治中期の『東京朝日新聞』の方針と連動しながら、旧来の新聞小説の読者が喜ぶ小新聞的な小説の意匠を借りる一方で、大新聞の読者にも訴える同時代の時事的問題や同時代言説の要素についても寓意的に表現する試みをしていた新聞小説家としての作家像を提示している。

本論文は、半井桃水について初期作品の具体的な分析という基礎的な作業を行い、桃水の本領である新聞小説家としての作家像を新たに提示している。加えて桃水の場合、『東京朝日新聞』で小説家として活動し始めた時期が明治中期に該当するため、本論文は、明治中期の新聞小説について、その基本的な性格と論点を可視化した事例報告としての意義もある。

以上から本論文は博士（比較社会文化）の学位に値すると認める。